栗田　春香

私は新米坊守です。

真宗大谷派との出会いは大学の入学式でした。宗教のことなど気にもせず、希望する学部に入学したわけですが、その入学式で勤行が始まった時の驚きを今でも覚えています。テレビ等で知っていた「なんまんだぶ」が「南無阿弥陀仏」だったことを知り、また日常でお念仏を称えるという環境に出会いました。

その後、大学で、研修で、報恩講で・・・何度となく法話を聞かせていただき、その度に新鮮な驚きと気づきでその時には何かがわかったような気になるのですが、しばらくすると結局何もわからないままの自分がいます。そして、その繰り返しに、これでいいのだろうかという不安と、本願を信じるということの難しさを感じています。

そんな中、去る２月に、前坊守である義母が急逝しました。まだまだ元気で、これからいくらでも坊守としての務めを教えてもらえるものと勝手に思っていた私は、「もう少しできることがあったのではないか？」とそんなことばかりを考えていました。しかし、毎朝お仏飯を供え、お線香をあげ、初七日、二七日、四十九日・・とお勤めをするうちに、以前のように焦ったり力むことなくお念仏を称えさせていただいていることに気づきました。義母の死を通して、自分も阿弥陀様に招いていただいているのではないか？と思えたのです。義母は一番大切なことに気づかせてくれたのかもしれません。

今後も、親鸞聖人の教えをどれほども理解できるようにはなれないのかもしれません。しかし、ただこれだけ、お念仏を称えることから改めて勤めていきたいと思います。